

## 慣習について問うとは

——慣習の規範性をめぐる議論を通して

筒井 晴 香

### 一 はじめに

我々の日常生活には、決まった挨拶の仕方や服装といった様々な慣習が見られる。もしも慣習が一切ない生活というものがあるとすれば、それは我々の生活とはかけ離れたものであるように思われる。慣習は我々の社会や生活を形作る重要な要素である。では、慣習とは何なのか。『デジタル大辞泉』には「ある社会で古くから受け継がれてきている生活上のならわし」とあるが、日常的場面において、我々が慣習について持っている理解はだいたいこのようなものであろう。

慣習は我々にとってなじみ深いものであり、我々は何が慣習であるのかについてある程度よく理解しているように思われる。では、次の問いを考えてみよう。「慣習は規範性を持つか」。これは簡単には答えにくい問いである。仮により分かりやすい形で「慣習は『しなければならないこと』か」と問いを立てたとしても、「そうかもしれないし、そうでない場合もあるかもしれない」といった答えしか出てこないのではないか。慣習を「ある社会で古くから受け継がれてきている生活上のならわし」と言い換えたところで、明確な答えを出すことは困難である。

「慣習は規範性を持つか」という問いはなぜ、どのような文脈で生じてくるのだろうか。慣習とは何かについて哲学的に検討するに当たり、問題となるのが、慣習とそれに関連する様々な集团的・社会的現象との異同である。

「慣習は自然の規則性かどうか」「言語は慣習か」「道徳は慣習か」これらの問いを考えると、  
「慣習は規範性を持つか」という問いは一つの鍵となる。単なる自然の規則性は規範性を含まないが、言語や道徳はそれぞれ何らかの意味において規範性と関連付けられる。これらと慣習との関係・相違を問う時に、慣習がそれ自体として規範性を持つかどうかという問いは看過できないものとなる。

「慣習は規範性を持つか」という問いに、明確な答えを与えることは容易でない。この問いを考えることで、「そもそも慣習とは何か」「慣習について問われた時に、具体的に何を問題にすればよいのか」という根本的な問いに対し、我々がごく曖昧な答えしか持ち合わせていないことが分かる。「慣習」という語のなじみ深さに反して、これらの根本的な問いは、どのように取り組んでいけばよいのかが必ずしも明らかでない。

慣習は我々の社会を形作る要素であるにもかかわらず、その内実は決して自明ではない。以下では、慣習に関する問いがいったい何を問題にしており、どのような仕方で答えるべきなのかについて考察する。その際に手掛かりとなるのが、「慣習は規範性を持つか」という問いをめぐる三人の哲学者の議論である。

## 二 ルイスの慣習概念と規範性

### 二・一 ルイスの慣習概念

「慣習は規範性を持つか」という問いにおいては、いかなる社会的現象のいかなる性質が問われているのだろうか。この点を考える上での手掛かりとして、まずは慣習概念について哲学的検討を行った代表的な哲学者であるデイヴィッド・ルイスの慣習理論<sup>①</sup>に注目する。以下ではルイスによる慣習概念の定義と、慣習の規範性に関する彼

の議論を見ていこう。

我々の社会生活の中では、ある種の恣意性を持った行為の規則性が見られる。ある地域で、道路の右側通行が行われている場合を考えてみよう。スムーズな通行を実現するという目的を果たすためには、必ずしも右を通る必要はなく、左でも構わない。右を通ることは、目的達成上の必然性がないという意味で恣意的だといえる。それではなぜ左でなく、右を通るようになったのか。一つの可能性としては、人々が話し合い、「道路を通る時は右を通る」と明示的に取り決めたということが考えられる。だが、右側通行という規則性が生じる可能性は他にもある。即ち、人々が互いの通り方に合わせて通行した結果、全員が右を通るようになったという可能性である。ここでポイントになっているのは、スムーズな通行のためには、右であれ左であれ、人々が皆同じ側を通らなければならないということである。つまりこの状況において、目的の達成のために重要なのは、全員が協調して同じ振る舞いを選択することなのである。よって、人々は互いの振る舞いを予測し合い、それに合わせて行動を選択するようになる。この結果として一定の振る舞いが全員によって取られ続け、行為の規則性が成立するのである<sup>(2)</sup>。

ルイスによれば、このようにして成立・存続する行為の規則性こそが慣習である。ルイスは、「恣意的であり、また明示的な取り決めもないにも関わらず、集団内で従われ続けている規則性」という特徴を慣習概念の核心に据え、そのような規則性がいかにして成立・存続するかを説明する理論を打ち立てる。その説明は以下のようなものである。ある集団が何らかの問題状況に直面し、その解決のためには、同等に有効な行為の選択肢の中から全員で同じものを選ぶことが必要になる。その集団の人々は互いの振る舞いを予測し合い、それに合わせて振る舞う<sup>(3)</sup>。結果として、全員がそれまで為されてきた前例に従って振る舞うようになる。このようにして成立した行為の規則性がルイスの慣習である<sup>(4)</sup>。

ルイスの慣習の具体例をもう一つ挙げよう。犬を「えね」でなく「いぬ」と呼ぶのはなぜか。「いぬ」という語

で犬を指示すること自体には必然性はない。だが、コミュニケーションを成立させるためには、何であれ全員が同じ語を用いることが必要である。犬を「いぬ」と呼ぶという行為の規則性は、上で示したような過程によって成立・存続する、ルイスの慣習の一種として捉えられる<sup>(5)</sup>。

ルイスはこの慣習概念によって、我々の社会生活において見られる慣習の特徴を巧みに描き出している。とりわけ、なぜ我々の間には明示的な取り決め無しに恣意的な規則性が成立するのかという問いに対し、相互予測という道具立てを使って明快な答えを与えている。

ここで「ルイスの慣習は規範的か」と問うてみよう。ルイスの慣習は定義上、全員が一斉に従わなければ、それに従った行為の目的が達成できないようなものである。従って、「ある集団においてルイスの慣習しがあれば、その集団の人々はみなしに従うべきだ」といえる。これは即ち、ルイスの慣習が規範的だということではないか。

しかし、ここで注意しなければならないのは「べき」の意味である。この意味について、ルイスは次のように述べている。ルイスの慣習の定義それ自体には、それが為すべきことであるとか、良いことであるといった語は含まれていない。だが、定義からは、ルイスの慣習に従う人々はたいていの場合、従うことが自分の選好に適い、かつ他者の選好と予測に適うものであると信じる理由を持つことが導かれる。そして、この点こそがルイスの慣習に従うべきと考えてよい理由を成す<sup>(6)</sup>。つまり、ルイスの慣習はそれ自体が為すべきものとして定義づけられているわけではないが、自他の選好・予測に適うという点において、為すべきものだといえるのである。

すると結局、ルイスの慣習には規範性があるといえるのだろうか。ここで次の点を明確にしておこう。そもそも「慣習に規範性があるのか」という問いにおいて、慣習のどのような性質が問題とされるのか。次節以降では、慣習の規範性に関するルイス批判としてマーガレット・ギルバート、フランチェスコ・グアラの議論を取り上げるが、彼らの論述からは、規範性を次のような意味で捉えていることが見て取れる。即ち、規範性とは、個人的利益の獲

得に貢献することによってではなく、何らかの仕方で義務感を生じさせることによって我々を動機付ける性質である。これ以降、本稿ではこのような意味での規範性に焦点を絞ることとする<sup>(7)</sup>。

ギルバートとグアラはともに、ルイスの慣習に伴う規範性を、次のような仕方で理解する。ルイスの慣習は、それに従うことが行為者自身と他の行為者の選好・予測に適うという特徴を持つ。しかしこの点からは、ルイスの慣習がそれ自体として遵守を義務付けるようなものであるとはいえない。それにもかかわらず、ルイスの慣習が、それに従うことを義務付けるような規範性を帯びることがある。それは、ルイスの慣習とは別に何らかの外在的な社会的規範があり、それがルイスの慣習からの逸脱を阻止するからである。具体的には、例えば「人々の選好・予測に適うことをすべし」といった社会的規範が考えられよう。ルイスの慣習は、このような外在的な社会的規範から派生する形でのみ、規範性を帯びるのである<sup>(8)</sup>。

慣習に伴う規範性に関するこのような捉え方に対し、ギルバートとグアラはそれぞれのやり方で疑義を呈している。以下では彼らの議論を詳しく見ていこう。

## 二・二 規範性をめぐるギルバートのルイス批判

ルイスの慣習理論に対し、徹底した批判を行っている哲学者の一人がギルバートである。ルイスの慣習は、協調を要する状況の存在や、同等に有効な選択肢が複数あるという意味での恣意性といった一連の条件によって特徴づけられていた。ギルバートによれば、これらの条件はいずれも、我々の間で実際に生じている慣習を特徴づけるものとしては不適切である。彼女は豊富な日常的事例によってこの点を示している。以下では、ギルバートによるルイス批判のうち、慣習に伴う規範性に関わるものに注目する<sup>(9)</sup>。

ルイスの慣習は、従うことが行為者達の選好・予測に適うゆえに、「人々の選好・予測に適うことをすべし」と

いった外在的な社会的規範に由来する規範性を持ちうるのであった。しかしギルバートは、「慣習に従うことが、従う行為者達の選好・予測に適う」という点に対し疑義を差し挟む。我々にとって慣習とは、従うことが望ましかったり、誰もが従うと考えられていたりするものだろうか。ギルバートによれば、そのような特徴は慣習にとって本質的ではない。

この点に関しては、ギルバートによる以下の例が参考になる。モリーが勤める部署では会議にフォーマルウェアで参加することが慣習となっている。だが彼女は、次の会議にフォーマルウェアで来る人はほとんどいないだろうと予測している。ジャックは嫌がらせのためわざとカジュアルな格好で来るだろうし、ジョーはきちんとした服を持っていない、ケイトは忘れ癖がある…、といった具合である。他の同僚もモリーと同様の予測をしていたり、あるいは特に何の予測も持っていなかったりする。それでもなお、モリーは部署の慣習を守ろうと考えている<sup>(9)</sup>。

この例について詳しく考えてみよう。「会議にフォーマルウェアで参加する」(以下、Fとする)という行為の規則性は、人々にとって自他の選好・予測に適うものとはなっていない。しかしこのような場合でも、Fは何らかの意味で慣習だといえるのではないか。モリーは「Fは私達の部署の慣習なのだから、従わなければいけない」と同僚達を叱るかもしれない。他の同僚達が彼女の主張を認め、謝罪したとしてもおかしいことではない。ジャックの振る舞いは、Fが慣習であるからこそ、人々への嫌がらせとして成立するのではないか<sup>(10)</sup>。このように考えれば、行為者の選好や予測のあり方は慣習の有無にとって本質的でないという考え方は一理あるといえる。すると「慣習は行為者達の選好・予測に適い、それゆえ(外在的な社会的規範に照らせば)従うべきだといえる」という主張は疑わしくなってくる。

だが、一方でギルバートは、「何らかの意味でそれに従うべきだといえる」という特徴を慣習にとって本質的なものと見ている<sup>(12)</sup>。彼女はモリーの例のような様々な日常的事例を持ち出すことで、ある行為の規則性が慣習で

あるということが、人々の利益への貢献といった理由に依存せずに、それ自体として遵守すべき理由を与えることを示している。モリーはFを面倒でナンセンスな悪習であり、従ったからといって誰も得する者はいないと思っ  
いても、なお「この部署の慣習だから従うべきである」と考えるかもしれない。

慣習のこのような規範性は、どこから出てくるのだろうか。上の例を考えると、部署という集団に言及すること  
で「べき」が支持されているという発想が自然と生じるだろう。ギルバートは集団性 (collectivity) を鍵として、  
慣習の規範性の説明を試みるのである<sup>(13)</sup>。

ギルバートは日常的事例を分析することにより、ルイスの慣習概念が、我々の日常生活の中にある慣習にうまく  
即していないことを明らかにしている。そして彼女は、我々が日常的に用いている慣習概念をよりよく捉えたもの  
として、自身の慣習概念を提示する。だが、本稿ではギルバートの慣習理論の詳細に立ち入ることはしない。以下  
で取り上げたいのは、むしろ慣習の規範性をめぐる議論それ自体に関する問題である。

ルイスの慣習理論は、現実が生じる様々な慣習に見られるいくつかの特徴を的確に捉えている。この点は、慣習  
の規範性をめぐる彼の議論についてもいえる。慣習は必ずしも、他の規範や価値から全く独立に、それ自体従わな  
ければならないこととされているわけではないだろうという主張はもっともらしい。また、ルイスの立場からは、  
モリーの例にあるような形骸化した慣習が、もはや慣習といえるのかどうか疑わしいと主張することも可能だろう。  
しかし、ギルバートの議論を見ると、これはこれで様々な慣習のあり方や、それに関する直観にかなっているよう  
に思われる。ギルバートの説明は、いわゆる因習や悪習において見られる特徴をよく捉えているが、これも我々の  
慣習の大きな一側面である。

両者の慣習概念のうちどちらが妥当なのであろうか。どのような基準によってそれを決めることができるのであ  
ろうか。我々が「慣習」という語をどちらの意味でよく用いているかによるのだろうか。あるいは、両者は異なる

種類の慣習について語っているのだろうか。だとすると、慣習とは二種類に大別されるものなのか。あるいはその他にも様々な慣習があるのだろうか。

「慣習は規範性を持つか否か」と問うに当たっては、慣習とは何か（そして規範性を持つとはいかなることか）についてある程度理解していることが必要である。だが、「慣習」の語が用いられる様々な例を考えると、「慣習とは何であり、どのような特徴を本質的に備え、その他の社会的現象といかなる点で区別されるのか」「慣習について問うときにどのような側面を問題にすればよいのか」といった問いが看過できないものとして浮かんできくる。慣習をめぐる問いにおいて、我々は慣習のどのような側面を問題にし、どのようなアプローチを取るべきか。この点について状況を整理し、興味深いアプローチを提案しているのがグアラである。

### 三 グアラの実験

#### 三・一 グアラの基本理念

グアラはギルバートと同じく、慣習それ自体を非規範的なものと捉えるルイスの見方を疑問視している。だが、彼は同時にギルバートのアプローチをも批判している。

ギルバートは様々な日常的事例を持ち出すことにより、我々の日常的な慣習概念の本質を明らかにしようとする。例えば彼女は、ある地域で皆が毎日午後四時にお茶を飲んでいたとしても、誰も特に「そうすべきだ」と思っていなかったとしたら、それは慣習とは言い難いといった主張をしている<sup>(14)</sup>。しかし、この事例について、彼らが午後四時にお茶を飲む慣習を持っていないことは、誰の目にも明らかだといえるであろうか。むしろ、これは慣習の有無を直観的に判断しづらい微妙な事例であり、人によって判断が分かれるのではないか。このような事例を通して分かるのは、我々の言語的実践が、ギルバートの例において慣習があるかないかを断定できるほどには、「慣習」



のような語の用法を十分に制約していないということである。日常的な慣習概念を整合性のある仕方で捉えることは、実は非常に困難なのである<sup>(15)</sup>。

グアラは、ルイスの試みを素朴概念の分析とは捉えない。従ってギルバートが指摘するように、「慣習」の素朴な用法の一部がルイスの理論に合致しなかったとしても、それは当然のことである。ではルイスは慣習理論の構築によって何を試みたのか。

グアラはルイスの理論を、素朴慣習概念の還元先となりうる科学理論として捉える。もちろん、単一の科学理論が素朴慣習概念の全ての特徴を捉えるという保証はない。だが、このような理論は、近似的にはあれ、「慣習」と呼ばれる現象を整合的な仕方で予測・説明することができるはずである。この解釈に照らせば、ルイスの慣習理論は「慣習概念に関する我々の素朴な直観をどれだけよく捉えているか」ではなく、「我々の間で生じる様々な社会的現象のうち、素朴慣習概念によって説明されるような経験的事実の多くを、よく予測・説明することができるか」によって、つまり経験的妥当性の観点から評価されるべきである。この点は、素朴心理学の神経生理学への還元と類比的に考えてみるとよく理解されるだろう。ギルバートのルイス評価は、そもそもルイスの理論の眼目を見誤っている点で不適切なものである<sup>(16)</sup>。

グアラの解釈に従うと、「慣習は規範性を持つか」という問いはいかなる仕方で問うことができるのだろうか。この点は以下のようにまとめられる。我々の素朴慣習概念は、決して整合的なものではない。よって、「慣習」の語が用いられるあらゆる現象について「慣習は規範性を持つか」と問おうとすれば混乱が生じてしまう。可能な回答はせいぜい「場合によりけり」といったものだろう。ルイスの慣習理論は、一連の現象を整合的な仕方で説明することを試みたものである。この理論が素朴慣習理論の可能な還元先となるためには、まずこの理論の経験的妥当性が十分に示されなければならない。経験的妥当性を評価するにあたって、問われることの一つに、慣習と規範性

との関係がある。ルイスの理論からは、慣習はそれ自体として規範的なものではないことが帰結する。だが、このような捉え方は、我々の間に実際に生じる現象を捉えるうえで適切なものであろうか。

右側通行の例から分かるように、ルイスの慣習概念は、素朴慣習概念の適用される現象の特徴をそれなりに的確に捉えている<sup>(17)</sup>。だが、これらの現象が、実は我々の間でそれ自体規範的なものとして扱われていたとしよう。この場合、ルイスの慣習理論は、経験的妥当性に関して大いに改善の余地があるものと言える。では実際のところどうなのか。それはルイスの慣習概念が適用される現象を実際に生じさせ、人々の振る舞いを観察することで、初めて明らかになる。

ここでは、「慣習は規範性を持つか」という問いが「ルイスの慣習が実際に生じたとき、それは規範性を持つか」という形で問われている。この問いに答えることは、素朴慣習概念によって捉えられるような一連の社会的現象を適切にモデル化する試みに、ルイスの理論が成功しているのかどうかを経験に照らして確かめることに他ならない。このとき、確かめた結果を踏まえれば、ルイスの理論をより現実<sup>(18)</sup>に即したもののへと改善することが可能であろう。そうすれば、我々の間に生じる「慣習」の規範性に関する側面を、より整合的な仕方<sup>(19)</sup>で理解することが可能になる。「慣習は規範性を持つか」という問いに対し、素朴慣習概念の精査によって答えようとするれば、素朴概念の曖昧さによって袋小路に陥ってしまう。グアラは「慣習」の意味を、素朴概念によって捉えられる多様な現象のまとまりの、近似的ではあるが整合的なモデルとしての「ルイスの慣習」に置き換えることで、この曖昧さを回避したのである。問いに答えるにはこのモデルが適用される現象を実際に生じさせ、人々の振る舞いを見てやればよい。

以上のような考え方に基づいて、グアラはルイスの慣習理論のうち、特に慣習の規範性に関する部分の妥当性を実験によってテストする<sup>(18)</sup>。実験内容の具体的な説明、検討を以下で行う。なお、この実験を通して彼は「慣習一般」のあり方についてではなく、あくまでも「ルイスの慣習」のあり方について結論を導こうとしている。この

点を明確にするために、以下では「ルイスの慣習」の意味で「L慣習」の語を用い、そうでない場合にのみ「慣習」の語を用いることとする。

### 三・二 グアラの実験の概要<sup>(19)</sup>

グアラは、L慣習が実際に規範性を帯びるか否かを経験的にテストするために、次のような設定で実験を行った。互いに相手が誰かを知らず、コミュニケーションを取ることもできない三人の被験者が、コンピュータを介してゲームを行う。これは各被験者が「赤」ないし「青」の二種類の選択肢から一方を選び、三人の選択の組み合わせに応じて各被験者に報酬が与えられるというものである（報酬は実験のために設定された通貨で支払われ、実験終了後に実際の通貨に換金される）。実験は複数の異なる条件下で為されたが、本稿の文脈で重要となるのは以下に示す二つの条件の対比である。

#### (ア) ベースライン条件<sup>(20)</sup>

この条件ではゲームは一〇回繰り返して行われる。最後の一回を除いた全ての回では、被験者達が全員で同じ色を選んだときのみ全員に報酬一〇が与えられ、それ以外の場合は全員が報酬ゼロとなる。つまり、被験者達が報酬を得るためには、赤であれ青であれ、全員で同じ色を選ぶことが必要である。従って各試行において、各被験者は次に他の二人が何色を選ぶかを予測し、それに合わせて色を選択することになる。この結果、赤青いずれかが全員によって繰り返し選ばれ続けるようになる。つまり「赤を選択する」ないし「青を選択する」という行為の規則性が確立するわけだが、これらの規則性はL慣習に他ならない。

ひとたびL慣習が成立すれば、被験者はそれに従い続けることで最大の利益を得られる。従って、L慣習を破る動機はどの被験者にもない。だが、この実験のポイントは、最後の回で一人の被験者に対し、L慣習を破る動機を

与えるところにある。これは一〇回目のゲームで各被験者への報酬を次のように変化させることによって為される。この回では、全員がL慣習に従えば、全員に等しく報酬二〇〇が与えられる。それ以外の場合、三人の被験者のうち二人は、報酬がゼロになってしまう。だが、残りの一人の被験者（可能的逸脱者（potential deviant）と呼ばれる。以下PDとする）は、「全員がL慣習に従った場合」よりも「他の二人がL慣習に従い、自分だけがL慣習を破った場合」の方が、多くの報酬（三〇〇）を得ることができるのである。つまりこの回では、PD以外の二人は、全員がL慣習に従って協調的行動を取った時に報酬が最大となる。一方、PDは、全員でL慣習に従うよりも、他の二人が従い、自分だけがL慣習を破った方が多くの報酬を得られるのである。この回でPDが最大の報酬を得るためには、L慣習を破り、他の二人の報酬を犠牲にしなければならないのである<sup>(21)</sup>。

実験前の指示において、各被験者は以下のように告げられる。ゲームは一〇回続けて行われるが、途中で報酬が変化する場合がある。その変化は必ずしも全員に知らされるとは限らない。だが、その回のゲームが終了した後は、報酬が変化したと、その変化を事前に知っていた人がいたのかどうか全員に知らされる。

実際には、先に述べたように、報酬の変化は必ず一〇回目で生じ、それを前もって知らされるのは三人の被験者のうち一人（PD）のみである。また、一〇回目のゲームが終わった後でも、報酬の額が具体的にどう変化したのかについて、PD以外の被験者に知らされることはない。

このゲームの終了後には三人がコミュニケーションを取ることはもはやないため、PD以外の二人は例えばPDが裏切ったことを知っても、PDに何らかの形で仕返しや制裁を加えることはできない（PDはこのことを知っている）。他の二人は報酬の変化を知らないという情報により、PDは二人が一〇回目もL慣習に従うだろうと予測できる。つまり、PDはこの局面において「L慣習に従って全員が同じだけの利益を得るか、それとも裏切って自分だけが最大の利益を得るか」という選択を迫られることになる。

一〇回目のゲームにおいて、PDが自分の利益よりもL慣習を優先させるか否かを観察することにより、以下の点が明らかになる。即ち、L慣習に従う行為者の間に、自己の利益の獲得という観点からは独立に、L慣習に従うことを指示するような規範的強制力が働いているか否か。また、その強制力はどの程度か。

結果として、実際にL慣習を破ったのはPDのうち三〇%のみであった。つまり、七〇%のPDに対しては、上記のような規範的強制力が働いていたのである。

(イ) 「一回限り」条件<sup>(2)</sup>

(ア) において示された規範的強制力は、「利他的に振る舞うべし」といった、L慣習とは異なる社会的規範に由来するのであろうか。それとも、L慣習それ自体が何らかの規範的強制力を持つのであろうか。「一回限り」条件はこの点を確かめるために設定された。

この条件においては、ベースライン条件における一〇回目のゲームと同様のゲームがただ一度のみ行われる。具体的には、まず二人の被験者が赤か青の二つの選択肢を選び、両者の選択が一致した場合に、三人目(PD)が「二人が選んだのと同じ色を選ぶ」または「違う色を選ぶ」という選択肢の一方を選ぶという仕方である。つまり、PDが他の二人と同じ色を選択すれば三人に等しく報酬二〇〇が与えられるが、PDが違う色を選択すれば、PDは同じ色を選んだ場合よりも多い報酬三〇〇を手にし、他の二人は報酬ゼロということになる。

「一回限り」条件下では、PDの六八%が違う色を選択した。この結果をベースライン条件での結果と比較すれば、集団でゲームが繰り返され、L慣習が生じることで、協調的行動が強化されていると分かる。

以上の実験結果を、グアラは次のような仕方で解釈する。ルイスの理論によれば、L慣習の規範性は、外在的な

社会的規範に由来するものであった。しかし実験において、被験者は共同行為 (joint action) の歴史により選択に影響を受けることが明らかになった。集団が共同行為の歴史を繰り返すと、彼らは意図せずに協調へのさらなる強制力を作り出すのである。グアラはこのような共同行為の繰り返しによって生じる規範性を、L慣習に内在的な規範性として位置づける<sup>(23)</sup>。

### 三・三 グアラの実験に関する疑問

グアラは「慣習は規範性を持つか」という問いを「L慣習は規範性を持つか」という問いに置き換えることで、もとの問いが持つ曖昧さを回避した。さらに、問いをこのように捉えなおすことで、グアラは、答えを出すために取るべき方法を明らかにしている。それは、ルイスの想定している場面において、我々が実際にどう振る舞うのかを実験により観察するというものである。このようなグアラのアプローチは、慣習について、直観の衝突を引き起こすことなく問うことができる方法を示している。

だが、グアラの実験の具体的な手続きと、それに対する解釈は、次の点において疑問を残すように思われる。グアラは、実験状況において生じるPDの非利己的振る舞いを、L慣習の内在的規範性を示すものとして捉えているが、この規範性は本当にL慣習に内在的なものであるのか。また、いかなる意味において内在的だといえるのか<sup>(24)</sup>。

### 四 L慣習の規範性とは

#### 四・一 グアラが述べる「L慣習の内在的規範性」とは

L慣習に規範性が内在していることは、実験結果からいえるだろうか。換言すれば、PDがL慣習とは異なる社会的規範に依存せずに「L慣習に従うべきである」と考えていることは、実験結果から導き出せるのだろうか。前

述の通り、グアラはこの点に関して次のような説明をしている。即ち、実験においては、単に集団が共同行為の歴史を作ってきたことによって規範的強制力が生じており、これはL慣習に内在的なものである。

グアラは、個人の利益よりも集団の利益を最大化させるような仕方では被験者に働きかけうる社会的規範として（ア）利他主義的規範、（イ）公平性の規範、（ウ）功利主義的規範の三種類を想定している<sup>25</sup>。実験では、L慣習が生じていない「一回限り」条件よりも、慣習が生じているベースライン条件の方が、個人的利益を犠牲にして協調的行動を取るPDの割合が多くなるという結果が得られた。

もし仮にPDが（ア）（ウ）のいずれかにコミットしており、それゆえに実験状況においてL慣習に従うべきだと考えていたならば、このような結果は生じないであろう。なぜなら、慣習が生じているか否かということは、利他主義的考慮・公平性の考慮・功利主義的考慮のいずれにも無関係だからである。（ア）（ウ）のいずれかの規範にコミットしているならば、PDは慣習があろうとなかろうと、ともかく協調的行動を取るはずである。ところが、実際には、PDが個人的利益を犠牲にして協調的行動を取るか否かは、慣習の有無によって影響を受けていた。つまり、慣習の存在によって、PDの協調的行動が強化されていたのである。

二つの条件におけるPDの協調的行動は、（ア）（ウ）の規範に照らせば、全く同程度に為すべきことであるといえる。だが、実験からは、L慣習の存在によって、PDが協調的行動を為すべきであることより強く感じるようになることが明らかにされた。グアラは、この点にL慣習の内在的規範性を見出す。つまり、L慣習の存在によって協調的行動が促されるのは、L慣習そのものから「L慣習に従う（つまり、協調的行動を為す）べし」という規範性が生じるためだと考えるのである。

グアラが実験から導いた結論は以下のようにまとめられる。L慣習は、現実の行為者の間において生じると、それに従うべきであるという規範性を持ったものとして捉えられる傾向にある。その規範性は、利他主義の規範や公



平性の規範、功利主義の規範といった、L慣習にとって外在的な社会的規範に由来するのではなく、L慣習それ自体に内在するものである。

#### 四・二 実験結果に対する可能な解釈

ゲアラは実験の結果を、L慣習の内在的な規範性の現れとして解釈し、外在的な社会的規範の影響を否定した。だが、この解釈は本当に妥当なものであろうか。

実験結果は、例えば次のような解釈をも許すだろう。「PDの行為は誠実さに関するある種の外在的な社会的規範に基づくものである」。ここで述べられている誠実さに関する規範とは、PDに対し「自分のこれまでの振る舞いによって他者に抱かせた期待を裏切ってはならない」と指示するようなものである。共同行為の繰り返しは、行為者達の間に「今後も共同行為が続けられるだろう」という予測を生じさせる。ベースライン条件において、他の被験者のPDに対する予測は、全く無根拠に生じた予測や願望等ではなく、それまで共同行為が繰り返されてきたという事実に基づいている。PDはこの共同行為に参加してきたことによって、実質的には他の被験者に予測を抱かせていることになる。従ってこの予測を裏切れることは、誠実さという観点からは為すべきでないことといえるだろう<sup>(26)</sup>。

ゲアラはPDの判断に影響を及ぼしうる社会的規範の候補として三種類を挙げたが、それらによって可能性の全てが網羅されているのかどうかは自明でない。PDの判断を外在的な社会的規範に基づくものとして捉える解釈は、得られた実験結果によって完全に排除されるとは言い難い。



#### 四・三 L慣習の規範性と現実の行為者のあり方

L慣習に伴う規範性を、L慣習に内在的なものとする解釈と、外在的なものとする解釈とではどちらがより適切なのであろうか。ここで以下の点に注目したい。実験においてL慣習に従う被験者は、理想化された行為者ではなく現実の行為者である。彼らは現実の社会において、様々な規範の下で生活を営んでおり、実験状況での他の被験者とのやり取りにおいても、それらの規範による制約をある程度受けているはずである。より具体的に述べれば、グアラの実験における被験者の多くは、公平に振る舞うべきだとか誠実に振る舞うべきだといった規範に従って日常生活を送っており、実験の場においても同様であろう。この現実の行為者のあり方は、進化的に獲得された人間の社会的認知・行動の様式と、行為者の属する社会・文化による影響の両者が関わって成立したものであるとして説明されるだろう<sup>(27)</sup>。

実験状況におけるL慣習の規範性の成立には、現実の行為者に特有の社会的認知・行動の様式や、彼らが従う社会的規範のあり方が関わっていると考えられる。例えば、現実において生じるL慣習の規範性は、L慣習に内在的だとしよう。これは、現実の行為者が、L慣習を内在的な規範性を持つものとして捉えてしまうということに等しい。では、なぜ現実の行為者はこのような捉え方をしてしまうのか。それは、現実の行為者が、L慣習のうちに規範性を見出してしまような認知のあり方をしていゐるためであろう。また、現実において生じるL慣習の規範性が、L慣習に外在的だとしよう。この場合、L慣習とは独立な社会的規範が、現実の行為者に対してL慣習の遵守を義務付けることになる。つまり、L慣習の外在的規範性は、現実の行為者が従う何らかの社会的規範から派生してくるのである。この場合、L慣習の規範性は、現実の行為者が、何らかの社会的規範に従って振る舞うというあり方をしていたために生じたものだといえる。

結局のところ、現実が生じるL慣習の規範性について考える上では、「我々がどのような行為者であるか」とい

う点が無視できないといえる。実験の結果がルイスの理論から予測できない部分を含んでいるのは、ルイスの理論における行為者は抽象化・理想化された行為者であるのに対し、実験においては現実の行為者が関わっているためである。現実の行為者は、理想化された行為者とは異なり、ルイスの定義が満たされる状況において、L慣習を規範として扱ってしまうようなあり方をしているのである。

この点についても少し詳しく説明しよう。L慣習は共同行為の繰り返しを経て生じる。共同行為の繰り返しは、それ自体として、当の共同行為を続けなければならないことを含意するものではない。よって、理想化された行為者は、(慣習の遵守を義務付ける外在的規範がない限り) 共同行為が繰り返されてきたからといって、それをさらに繰り返す(「慣習に従う」べしという規範が成立するとは考えないであろう。だが、現実の行為者は、このような状況において「共同行為を繰り返す(「慣習に従う」べし」という規範が成立していると考え、それに従って振る舞うのである。この点は現実の行為者に特有の社会的認知・行動のあり方や、彼らが従う社会的規範のあり方によって説明される。現実において、L慣習が外在的な社会的規範と結び付けられていると仮定すれば、我々がいかなる社会的規範にコミットしており、そのうちのどれが、なぜ、慣習と結び付けられるのかが問われる。また、L慣習が内在的な規範性を持つものとして扱われていると仮定すれば、我々がなぜL慣習を規範として扱うようなあり方をしているのかが問われる。

「行為Pを為す」というL慣習に従う際の、理想化された行為者と現実の行為者の相違を以下にまとめる。まず、理想化された行為者達を考えよう。慣習の遵守を義務付ける外在的規範に一切コミットしていない場合、彼らは次のように考えることで、相互の行為の予測から自らの行為の決定へと至る。「他の行為者達は、次回も私がPすると考えるだろう。よって、次回も彼らはPするだろう。ならば、私もPした方が自分の利益になる。よってPしよう」。これに対し、現実の行為者達は、単に「私もPした方が自分の利益になる」と考えるのみならず、「(Pした

方が利益になるということとは独立に) Pすべきだ」と考えるのである。これはなぜか。L慣習の規範性が内在的なものであるという立場を取れば、現実の行為者にとってPすべきである理由は、端的に「PすることがL慣習だから」ということになる。一方、L慣習の規範性が外在的であるという立場を取れば、現実の行為者にとってPすべき理由は、例えば「共同行為をともにしてきた他者を裏切ってはならない」といった、L慣習それ自体とは独立な社会的規範に訴えて説明されることになる。

ゲアラは慣習概念の精査に当たって、我々の日常言語の分析を行うのではなく、L慣習概念を、「慣習」と呼ばれる多様な社会的現象を近似するモデルと捉え、実験を通して精緻化するというアプローチを採用する。これは即ち、実験によるモデルの精緻化を通して、我々の社会において実効力を持つ規範や、我々に特有の社会的認知・行動のあり方をL慣習のモデルのうちに反映させていくということに他ならない<sup>(28)</sup>。だとすれば、実験結果を解釈し、L慣習のモデルに反映させるに当たって、我々の間にあるいかなる規範、また我々の持ついかなる認知・行動様式が結果に影響しているのかを明らかにすることで、現実の社会的現象に関するより豊かな描像が得られるのではないか。また、その際には社会学・文化人類学・社会心理学・進化心理学等において得られている知見がおおいに役立つであろう<sup>(29)</sup>。

ゲアラは、「共同行為が繰り返されると、被験者はそれをさらに繰り返すことに対して義務感を持つ」という実験結果に基づき、L慣習は現実が生じるとそれ自体として規範性を持つと結論する。だが、この規範性が何に存するかを明らかにするためには、被験者がどのような規範にコミットしており、いかなる社会的認知・行動の様式を持っているかについて探求する必要があるだろう。この結果によっては、L慣習に伴う規範性はむしろ、L慣習それ自体に帰属させるよりも、行為者の特有の認知・行動様式とL慣習のあり方との関係的性質として捉えたほうが、全体として現実の社会的現象のよりよいモデルを成す可能性もある。規範性をL慣習に内在化させるゲアラの

結論は、やや性急であろう。

## 五 まとめ

### 五・一 慣習の規範性について問うとは

「慣習は規範性を持つか」という問いは結局何を問題にしているのか。ゲアラの議論に沿って考えると、「慣習」という語の多様な日常的用法の全てをカバーするような仕方では上記の問いに答えることは非常に困難であり、また、それによって慣習概念に対する整合的で有益な理解が得られるとは考え難い。この問いは、「慣習」と呼ばれる多様な社会的現象を近似的に予測・説明できるようなモデルを作る過程において、モデルにいかなる要素を盛り込むべきに関わる問いとして捉えるべきである。慣習のモデルに規範性を持たせるべきか否かは、直観のみに頼るのではなく、経験的事実に訴えて判断する必要がある。

ゲアラは「慣習概念を、「慣習」と呼ばれる多様な社会的現象の近似的なモデルと見て、実験により、このモデルのもたらす予測と実際の社会的現象とがずれてくる点を明らかにした。このずれこそが「慣習に伴う規範性」に他ならない。だが、このずれは何に起因するのだろうか。実験において、ルイスの定義に合致した過程が生じたにもかかわらず、結果としてルイスの想定にない規範性という性質を持った行為の規則性が成立したのは、被験者が規範性をそこに読み取り、「慣習を規範的な規則として扱ったからだと考えられる。すると、規範性が何に起因し、またなぜ生じたのかを明らかにするには、現実の行為者達がコミットする規範や、彼らが規範性を認知する能力がどのようなあり方をしているかについて知る必要があるだろう。この点が明らかになって初めて、「慣習をそれ自体規範的なものとしてモデル化することが適切であるか否かが判断できるのではないか。

## 五・二 慣習について問うとは

慣習について問うとは、結局のところいかなることか。ゲアラの線に沿えば、それは、「慣習」の語が適用される多様な社会的現象を、ある仕方で近似・抽象化したモデルを作り、必要に応じて経験に照らし精緻化を行っていることである。すると、慣習概念に規範性が含まれるか否かは、「慣習」と呼ばれるものを含む様々な社会的現象をどのように切り分け、抽象化するかによって変わってくるといえる。そして、モデル化を眼目とするいかなる試みも、実際に「慣習」と呼ばれるものの全てに共通する性質について結論を出そうとする試みではありえないだろう。

さらに、このモデル化の仕方には、我々が様々な社会的場面において、いかなる認知・行動様式を持つのか関わってくるだろう。慣習に従う場面において、我々の振る舞いに示されるある傾向性は、慣習に従う場面に特有のものであることもあれば、我々の一般的な行動傾向に起因する場合もあるだろう。実際にどちらなのかを知るためには、慣習に従う場面のみならず、多様な社会的場面における我々の認知・行動のあり方についての知識を参照しなければならない。慣習について問うとは、慣習を作り出してそれに従う行為者である、我々自身のあり方について問うことでもあるといえる<sup>(30)</sup>。

### 文献

注…再録表示を付した文献の場合、本文の注で示した参照ページは再録版による。

Bicchieri, C. 2006. *The Grammar of Society: the Nature and Dynamics of Social Norms*. Cambridge: Cambridge University Press.

Burge, T. 1975. "On Knowledge and Convention". *The Philosophical Review*, 84: 249–55.

Cubitt, R. P. and Sugden, R. 2003. "Common Knowledge, Salience and Convention: a Reconstruction of David Lewis' Game Theory".

*Economics and Philosophy*, 19: 175–210.

- Gilbert, M. 1981. "Game Theory and Convention". *Synthese*, 46: 41–93.
- 1983. "Agreements, Conventions and Language". *Synthese*, 54: 375–407.
- 1989. *On Social Facts*. New York : Routledge.
- 2008. "Social Convention Revisited". *Topoi*, 27: 5–16.
- Guala, F. 2007. "The Philosophy of Social Science: Metaphysical and Empirical". *Philosophy Compass*, 2: 854–80.
- Unpublished. "Are there Lewis Conventions?" <http://users.unimi.it/guala/Lewis%20conventions%203.pdf>. 2009. 7. 6 論
- Guala, F. and Mitton M. 2008. "An Experimental Study of Conventions and Norms". *CEEL Working Papers*, 10–08. Computable and Experimental Economics Laboratory, Department of Economics, University of Trento, Italia. [http://www-ceel.economia.unin.it/papers/papero08\\_10.zip](http://www-ceel.economia.unin.it/papers/papero08_10.zip). 2009. 7. 6 論
- Jackman, H. 1998. "Convention and Language". *Synthese* 117: 295–312.
- Levy, N. 2005. "Imaginative resistance and the moral/conventional distinction". *Philosophical Psychology*, 18: 231–41.
- Lewis, D. 1969. *Convention: A Philosophical Study*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- 1972. "Languages and Language". In K. Gunderson, ed., *Minnesota Studies in the Philosophy of Science* (3–35). Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Miller, S. 1982. "Lewis on Conventions". *Philosophical Papers*, 11: 1–8.
- Millikan, R. G. 1998. "Language Conventions Made Simple". *Journal of Philosophy*, 95: 161–80. Reprinted in her *Language: A Biological Model* (1–23). Oxford: Clarendon Press, 2005.
- Skyrms, B. 1996. *Evolution of the Social Contract*. New York: Cambridge University Press.
- Turiel, E. 1983. *The Development of Social Knowledge: Morality and Convention*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 1998. "The Development of Morality". In W. Damon, ed., *Handbook of Child Psychology*, 5<sup>th</sup> ed., vol. 3: N. Eisenberg, ed., *Social, Emotional, and Personality Development* (863–932). New York: Wiley.
- Quine, W. V. 1936. "Truth by Convention". In O. H. Lee, ed. *Philosophical Essays for A. N. Whitehead*. New York: Longmans.
- Vanderschraaf, P. 1995. "Convention as Coordinated Equilibrium". *Erkenntnis*, 42: 65–87.
- Wedgwood, R. 2006. "The Meaning of 'Ought'". In R. Shafer-Landau, ed. *Oxford Studies in Metaphysics*, vol. 1 (127–60). New York: Oxford

University Press.

—— 2009, “The Normativity of the Intentional”. In B. P. McLaughlin and A. Beckermann, eds., *The Oxford Handbook of the Philosophy of Mind* (421–36). Oxford: Clarendon Press.

註

- (1) ルイスの慣習理論はゲーム理論を下敷きとしているが、本稿では紙幅の都合上、ゲーム理論的道具立てへの言及を含む詳細な説明を行うことはせず、この理論の根幹を成すアイデアのみを取り上げる。ルイスの慣習理論の詳細については Lewis 1969 を参照。
- (2) 実際には多くの社会において、右側ないし左側通行は交通法規において明示的に取り決められているだろう。だがこれらの明示的規則は、既存の慣習を明示化・強調する形で制定されたとも考えられる。また、エスカレーターの利用者（関東では左側、関西では右側に立つことが一般的）等は、取り決めに基づかないような通行の規則性の具体例といえる。
- (3) このような行為者相互の予測が行われるためには、各行為者が互いに、他者の持つ信念や知識、他者がそれなりに合理的な思考を行っていること等について知っている必要がある。ルイスは「共通知識 (common knowledge)」という概念を用いることで、この要件を慣習の定義の内に盛り込んでいる。共通知識については *ibid.*: 52–60 を参照。
- (4) ルイスの慣習の定義の詳細については、*ibid.*, Chs. 1–2 を参照。
- (5) 言語の慣習性を説明することは、ルイスの慣習理論の主要な目的であった (*ibid.*, 2–3)。この背景には、クワインに代表される「言語哲学における規約主義 (conventionalism) 批判の流れがある」(Quine 1936 参照)。
- (6) Lewis 1969, 97–8.
- (7) 慣習が持つ規範性として考えられる性質は、必ずしも慣習に従う義務に関わるものだけではないと考えられるが、詳しい検討は紙幅の都合上、機会を改めて行うこととしたい。「べき」が常に義務を含意するという仮定への反論については Wedgwood 2006 「べき」をはじめとする規範的語の意味の多様性と文脈依存性については Wedgwood 2009 を参照。
- (8) Gilbert 1989, 353–4; Guala and Mittone 2008, 5.
- (9) 先取りして述べると、ギルバートの論述は、ルイスによる規範性の取り扱いに対し、「慣習に伴う規範性は、ルイスの想定しているものと質が違ふ」「慣習はそもそも、ルイスの想定しているような種類の規範性を必ずしも伴わない」という二点か



ら反対しているものとして読める。但し、慣習の規範性を明示的にテーマにした箇所 (Gilbert 1989, 349-55) において提示されている論点は前者のみである。しかし、この論点は後述のモリー例において見られるような種類の慣習の規範性を重視する直観に強く依存しているため、単独では弱いと感じられる。従って本稿では、Ibid., 341-44, 346-49; Gilbert 2008, 7-8 等を参考にし、論点の再構成を行っている。

- (10) Gilbert 2008, 7-8.
- (11) 慣習に従わないことが、実質的には他の行為者にとっての攻撃になるという点については Ibid., 7 を参照。
- (12) Gilbert 1989, 350.
- (13) Ibid., 352.
- (14) Gilbert 1989, 350.
- (15) Guala unpublished, 5-6.
- (16) Ibid., 9-10.
- (17) ルイスは自らの慣習理論で説明できる事例として、他にも、パーティでの服装や通貨といった例を挙げている。Lewis 1969, 5-8; 42-51 参照。
- (18) グアラは Guala 2007 で、経験科学の手法や知見に訴えることは、社会科学の存在論一般において重要である旨を論じている。
- (19) 実験の概要については Guala unpublished, 10-3 を、詳細については Guala and Mittone 2008 を参照。
- (20) Guala and Mittone 2008, 9-11.
- (21) 一〇回目においては、協調した場合に得られる報酬が一〇から二〇〇へと大幅に増やされる。これは P D が慣習を破ることを思いとどまる一因となりうるのではない。P D は九回目までの報酬と比べて、報酬二〇〇を十分に多いと感じ、わざわざ他の二人を裏切ってまでそれ以上の報酬を得ようという気にはならないかもしれない。一〇回目の報酬をなぜ大幅に増やしたのかについて、グアラは特に説明を与えていないが、本来ならば説明すべき点であろう。
- (22) Ibid., 15-6.
- (23) Guala unpublished, 13.
- (24) 本稿では詳しく取り上げることができなかったが、これらの問いに加え、「P D の非利己的振る舞いが、本当に規範的強制



力によるものといえるのか」という問いも当然生じうる。ゲアラの解釈は、我々が「もしPDの立場になったら」と想像することで得られるような、ある程度直観的な理解に依存したものであろう。この解釈に対し、「規範的強制力ではなく、単に他人に良いことをしたいという欲求が介在していた可能性は否定できない」といった反論がありうる。だが、仮にPDが利他的欲求によって行動したとしても、そのような欲求は結局、我々の社会に、利他行動を重んじる規範があるからこそ生じたのではないか。もしも既存の社会的規範や価値体系に一切基つかない形で利他的欲求が生じたとすれば、それは逸脱的な欲求であり、多数の被験者に帰属させるにはそれなりの理由が必要であらう。このように考えれば（規範的強制力が慣習に内在的なものであるという点は疑わしくなるとしても）PDが規範性の影響を一切受けずに振る舞ったとは考えづらい。

(25) Guata and Mitone 2008, 12.

(26) あるいは以下のような解釈も可能である。九回のゲームを通して、被験者達の間にはある種の共同体としての意識が生まれた。これにより、共同体にまつわる何らかの社会的規範が彼らの行為に影響を及ぼすようになり、結果として裏切り行為が抑制された。これはギルバートの考え方に近い解釈であるといえる。

(27) 例えば、現実の行為者の利他的振る舞いは、利他行動が進化する仕組みと、彼らが属する社会・文化における道徳や社会的規範のあり方の双方に基づいて説明されるだろう。

(28) ここでは、方法的個人主義を採用すれば慣習に従う個々人のあり方が、慣習にコミットする集団を複数主体 (plural subjects) として認めればその集団の主体としてのあり方が関わってくるであろう。本稿では特にどちらの立場にもコミットしない。

(29) このような研究の好例として、社会科学の哲学者であるクリスティーナ・ビッキエリによる、社会的規範の理論が挙げられる。社会的規範が行為者の実際の振る舞いに及ぼす影響には状況依存性や個人差が見られるが、ビッキエリは認知心理学におけるカテゴリー化・シミュレーション研究の成果を援用することで、状況依存性や個人差を含むような社会的規範のモデルを構築している。Bicchieri 2006 参照。

(30) 本稿執筆に当たって、東京大学大学院の島村修平氏より多くの貴重なコメントを頂いた。また、匿名の査読者の方からのコメントは本稿の修正にあたり大変有意義であった。この場を借りてお礼申し上げる。

\*この論文は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。